

令和6年度 第2回新潟市歴史博物館運営協議会 会議録要旨

【日時】 令和7年2月14日（金）
14時00分～16時00分

【場所】 新潟市歴史博物館本館2階セミナー室

【出席委員】 池田 哲夫 会長 （新潟大学人文学部名誉教授）
渋川 綾子 副会長 （にいがた湊あねさま倶楽部）
石黒 裕則 委員 （新潟市立木崎中学校校長）
大籾 裕一郎委員 （新潟市小中学校PTA連合会副会長）
久保 有朋 委員 （古町花街の会）
小野 朋子 氏 （BSN新潟放送 品田委員代理）
中村 美香 委員 （(有)ミカユニバーサルデザインオフィス）
南雲 友美 委員 （公募委員）
廣 光治 委員 （日本旅行業協会新潟県支部長）

【オブザーバー】 萬歳 真紀 新潟市歴史文化課 課長

【事務局】 坂井 秀弥 新潟市歴史博物館 館長
小林 隆幸 新潟市歴史博物館 副館長
高桑 一代 新潟市歴史博物館 総務担当次長
鷲尾 雄二 旧小澤家住宅 館長
石田 孝子 新潟市歴史博物館 企画普及課長
森 行人 新潟市歴史博物館 学芸課長
高橋 久美 旧小澤家住宅 職員
室橋 亜衣 新潟市歴史博物館 職員

【 次 第 】

1. 開 会

2. 館長挨拶 詳細別紙

3. 議事

(1) 令和6年度の事業報告

スライドを用いて説明。 詳細別紙

《意見・質疑応答1》 詳細別紙

(2) 博物館の理念・課題・評価について

資料1～3に沿って説明。 補足別紙

《意見・質疑応答2》 詳細別紙

(3) 令和7年度事業計画

資料4・5に沿って説明。

《意見・質疑応答3》 詳細別紙

4. その他

萬歳課長から「新潟市令和7年度予算案の概要」等の説明。 詳細別紙

《意見・質疑応答4》 詳細別紙

5. 閉会

≪館長挨拶≫

(坂井 館長)

皆様方には日頃から当館の活動について大変なご支援・ご協力をいただき感謝申し上げます。今年度はみなとぴあの開館 20 周年にあたり、前回は「北前船と新潟」展を準備しているところを見ていただいた。夏から秋にかけては、北前船をテーマに信濃川クルーズと街歩きをジョイントしたり、日本遺産を見るツアーを開催したりと盛りだくさんのイベントを開催して大変好評を得ている。お陰様で昨年度より入館者数が 1 万人程増えそうという明るい兆しもある。これは敷地内の人数は入っておらず、それ以上に多くの人に来ていただいている。

20 周年にあたり、本日の資料に示すようにこれまで積み重ねてきた成果とそれを踏まえた課題を抽出し、これからの当館が目指す運営方針と評価のあり方を館内の職員で打合せをし検討した。まだ不十分な部分もたくさんあるが、忌憚のないご意見をいただき、当館がより良い博物館になり、そして新潟市の街づくりにも大きく貢献できるようにこれからも活動を続けたいと思っているので、どうか多くの意見をいただきたい。

≪令和 6 年度事業報告≫

(小林 副館長)

私から令和 6 年度後半期事業について、特に今年度ならではの特徴的なものに限って報告したい。

前回「北前船と新潟」展を準備している様子をご覧いただいたが、その後 7 月 27 日に開幕を迎え、9 月 1 日まで 33 日間開催し、4,063 人が観覧した。今回新潟県外まで幅を広げることができなかったが、佐渡市や出雲崎町の資料（江戸時代の弁財船の模型）などを借用し、にぎやかに展示することができた。新潟市が北前船の日本遺産に認定されており、東北から北陸にかけて日本遺産認定の他自治体のバナーを同時展示し、日本遺産であることを強調した。

この会期中に連続講演会を 4 回実施した。初回の 8 月 3 日は新潟ハイカラ文庫の横木氏のご登壇で「北前船と新潟の廻船問屋」と題しお話をしていただいた。8 月 10 日には「北前船の瀬戸内海・尾道」と題して尾道市文化振興課専門員の西井氏にご登壇いただいた。西井氏は北前船の日本遺産で大活躍されている。8 月 24 日は県立歴史博物館の田邊氏による「北前船が運んだもの」の講演。最終回 8 月 31 日は当館の坂井館長により「北前船がつなぐ港町新潟と大阪住吉大

社」の演題で講演をした。いずれも 80 人程の方が聴講した。

関連して小学校 5・6 年生の親子向けの北前船セミナーを行った。小樽商科大学の高野氏とオンラインでつないで講座を聴き、その後「北前船と新潟」展を観覧する企画。残念ながらオンラインがスムーズに接続できなかったため、急遽代わりに当館の安宅学芸員が別の教材を用いて講座をし、その後こどもたちを展示案内する内容に変更した。地元のネタをふんだんに使った内容となったので、好評を得ていた。

9 月 14 日から 12 月 1 日まで「むかしのくらし展」を開催。小学校の単元にあわせて毎年行われている企画だが、今年度は暮らしの環境というテーマで行った。新潟の人々は浜・潟・山・川など多様な自然環境の中で暮らしてきたが、まだ環境に直接影響されていた時代の生活やその道具を展示紹介しながら、環境の視点で暮らしを眺めるという内容。家の中で使われる生活道具や、農業で使う農具、漁業で使う舟などを展示してこどもたちに当時の暮らしを想像してもらった。関連事業として浜に着目し「新潟のハマをみる・きく・あるく」という、ゆいぽーとと西海岸公園を会場にしたイベントを行った。ゆいぽーとで昔の浜の話をした後、海岸に出て海岸を眺めながらビーチコーミングをし、集めた漂着物をマリニピアの学芸員に講評していただいた。またこどもたちに「むかしの「運ぶ」道具をつかってみよう」という企画も行った。本当はキッツオブネも体験してもらう予定だったが、雨天のため屋外でできず、ヤマカゴやテンビンボウなどを体験してもらった。

冬には「新令和版弘長寺二十五菩薩来迎図」展と新収蔵品展を同時開催した。通例では収蔵品・新収蔵品展という枠で実施しているが、今年度は新潟大学准教授の永吉秀司氏が関川村の弘長寺で制作された二十五菩薩来迎図を、お寺から借用して永吉氏と共催した。永吉氏の作品を中心に、制作に使われた顔料・金箔等の材料や道具も展示した。同時に、今年度当館で収蔵したものを新収蔵品展として展示。絵画などのほか、特に今年目立ったのが戦争関係の資料の寄贈。横越に落ちた B29 の部品の一部や、新潟に原子爆弾が落とされるかもしれないと 8 月 10 日に新潟県知事の方から下された疎開命令書。これは元々個人蔵で、夏に新潟日報で紹介されていたが、その後当館に寄贈された。関連事業として永吉氏より解説会を 2 回行っていただいた。12 月 15 日に「来迎図表現について」、1 月 26 日に「描画方法について」と題し、会場で解説会が行われ、大勢の方が参加した。解説会終了後はサイン会が行われ、図録を買った参加者の行列ができて

いた。この他1月12日に「砂子体験と墨で描く線の世界」という、実際に金箔を用いて行うワークショップも開催した。

2月8日から「石川侃齋」展が始まっている。新潟出身の画家をテーマとした展覧会で、この後皆さんにご覧いただければと思っている。

次に今年度目立った事業を紹介する。

1点目は「はじめてみなとびあ」。博物館にこれまで触れる機会がなかった未就学児向けに機会を設け、将来の博物館利用、文化財や歴史を考えてもらうきっかけ作りで始めた。現在連携している保育園は入舟保育園と赤沢保育園、西区の大友中央保育園の3園。園児たちが春・夏・秋・冬にそれぞれやってくる企画で、今年は計11回来ている。園との連携以外に、親子向けに同様の企画をしており、6、8、11、3月の計4回、未就学児と親御さんに博物館を体験してもらっている。敷地から拾ってきたドングリを縄文時代の擦り石と石皿で擦り潰したり、糸車体験をしたりした。

部活動地域移行というのと、どちらかというスポーツ・音楽関係が中心になるかと思うが、柳都中学校から文化部の受け入れが可能かと相談を受け、今年試験的に受け入れてみた。8月に柳都中学校歴史文化クラブの生徒4人に、当館の収蔵庫に入るバックヤード体験や、収蔵庫で実際の歴史資料に触れる体験してもらった。

また市で特別予算がついた重点事業として、北前船をテーマとした3つの関連ツアーを行った。1つは8月に実施した、小学生とその親が対象の「夏休み！親子新潟みなと歴史探訪」。当初8月18日と25日を各40人募集したところ300人程の応募があったため、急遽9月1日を追加し、さらに各日2回実施することで大勢の人を受け入れられるよう内容も変更した。当館セミナー室で歴史を学習した後、ウォーターシャトルに乗船して解説を聞きながら現在の港を観察してから、戻ってワークシートを使いながら「北前船と新潟」展を観覧、さらに旧新潟税関庁舎の見学もする内容で、こどもにとって充実した企画だった。2つ目が「新潟湊とつながる川湊を巡る日帰りツアー」。新潟港と舟運で結ばれる在郷町を船とバスを利用して見学する企画で、3回行った。当館は旅行免許がないため、地元旅行会社と連携し実施した。9月29日は在郷町の小須戸と酒屋を巡るツアー。当館脇の船着場から乗船し、通常定期便はふるさと村までだが、信濃川のさらに上流の小阿賀野川と合流する地点である白根の赤渋まで特別に航行した。その後、地元のボランティアガイドと、小須戸と酒屋の街歩きをした。白

根の浅野橙という料亭で昼食をとったが、ご主人が南区創生会議の取締役ということで、創生会議からサプライズで地元産シャインマスカットと生ハムの特典があった。9月21日には通船川を航行して阿賀野川を横切り、バスに乗り継いで新井郷川の在郷町・葛塚を散策するツアーを行った。大雨警報が出て中止になるかと思ったが、船長が大丈夫とおっしゃるので、皆で重装備してクルーズを楽しんだ。通船川の津島閘門で川のエレベーターを通り、幅の広い阿賀野川を横切るといった体験をした。3つ目は、市内に十数か所ある、北前船の日本遺産認定構成文化財を当館学芸員が添乗して解説しながら一気に見る企画。これも地元の旅行会社に依頼をし、10月に2回実施。当館でも初代新潟奉行川村修就の関連資料が構成文化財となっており、参加者に特別公開した。またツアーの最後、当館を会場に構成文化財の一つである古町芸妓の踊りを披露してもらった。

ここ数年、当館のボランティアに高校生が加入し現在30名程登録している。8月に彼らが企画・実施するイベントを行った。クイズラリーや、宝物をみつけるトレジャーハント、昔の道具で昭和を体験するタイムスリップ、昔の遊びができる夏祭りといった企画が考案された。

学校連携は開館当初から行っているが、今年初の試みが「教員の日」イベント。社会科教員が中心になると思うが授業で博物館の活用機会をさらに高めてもらいたく、無料開館の日を設けた。館内見学のほか、昔の屏風の体験、実際に当館で使用している戦争関係の資料、戦時中のポスター、民具などの資料を校外研修や授業活用の方法とともに提案した。昔の道具は実際の使い方も示した。

(鷲尾 旧小澤家住宅館長)

私からは7月以降の旧小澤家住宅の事業を報告する。

桜井進一氏写真展「ふるさと新潟海岸―我は海の子―」では、桜井氏が撮影した昭和20年代後半以降の新潟海岸、新潟市の中央区、東区、西区の海岸沿いを、海水浴場中心に展示し、当時の姿を見ていただいた。観覧者数は1,900人余り。

新潟郵趣会展「オリンピックイヤーによせて―」は9月14日から3週間程の会期で、観覧者数は1,000人余り。昨年はパリオリンピックの開催年で、それを記念してオリンピックにちなんだ切手や絵はがき、グッズを郵趣会メンバーに持ち寄っていただき展示した。

その後は恒例の「新潟仏壇工芸」展を開催。10月11日から11月4日まで。観覧者数は2,000人弱。会期中の11月3日は新潟市の施策で、文化施設の無料

入館日となっており、例年 500 人くらい来館する。無料になるということもあり、大勢の方に見ていただいた。新潟・白根仏壇は伝統工芸品に通商産業省で指定されているが、新潟仏壇組合の協力で展示をしている。例年仏壇だけでなく、仏壇の技術を使った様々な小物類を展示している。今年はいけばな流派・池坊の先生と「新潟はなうるし展」という名前でコラボした。仏壇組合の職人が花瓶の下の花台を漆塗りや蒔絵で制作し、その上に池坊のお弟子さんや先生に花を活けていただくタイアップ企画。池坊の流派の方には大変ご協力いただきありがたかったが、いけばなは日持ちせず、毎週お花を入れ替えた。週一回の休館日があるため 6 日間展示するが、6 日間持たせるのも大変で、2 日に 1 回程度お花の世話や、しおれかかったものを活け直して、活け花展は大変だと肌で感じた。

小澤家の所蔵品を数年に 1 回展示する、小澤家の品々「明治期東京土産写真」展を 11 月 16 日から 12 月 22 日まで開催。観覧者は 1,000 人。東京の名所や著名人が写った名刺サイズの写真で、今でいうと絵葉書にあたるが、絵葉書が登場する前にこういった東京土産が明治時代に流行ったそう。小澤家当主が東京に出かけた折に家族に見せるため、または自身の記念として持ち帰ったものが、当館では数多く所蔵している。

1 月には「羽子板」展を開催した。小澤家に贈答された羽子板で、当館の所蔵品を展示した。お正月の雰囲気醸し出す意味もある。メンテナンス休館の直前で期間が比較的短く、気象条件が悪い時期で、来館人数が寂しく 300 人程。

明日から「ひな人形とからくり人形」展を開催する。小澤家伝来のひな人形のほか、近隣の方から寄贈や借りているものなど実は多数のひな人形を持っており、一堂に展示している。貴重なからくり人形も道具蔵に展示している。

古文書講座は年 2 回、6 月頃と 9 月又は 10 月頃に開催している。

7 月 13 日に立川志の輔門下の二つ目、立川志の彦を招いて落語会を催した。

11 月 23 日は毎年恒例で秋の大文化祭をしている。パンや焼き菓子など飲食等の物販やアルコールも提供するバー、歌と踊り、三味線のライブ、不用品のバザー、絵画・陶磁器の文化祭的展示など、盛り沢山の内容。1 日で 247 人と、通常の何倍も多くの方に来ていただけた。

また調査研究事業として、旧小澤家住宅周辺の歴史的町並みを考える会という住民団体に当館も協賛している。毎回当館で会議をし、様々な調査研究、講演会、イベントなどを開催。11 月 9 日の夜には周辺地区に多く残っている歴史的建造物をライトアップし、建物間の味わいある小路に行燈を設置して小路を散

策していただく催しをした。スタンプラリーを企画し、あら汁を1杯プレゼントするといった様々な仕掛けを用意し、来場者に楽しんでいただいた。

9月16日、ようやく来館者数が20万人に到達した。平成23年7月2日に当館がオープンしてから13年2カ月程かかった。東京から当日お越しの20万人目の来館者に、蒔絵の飾りの小さな額をプレゼントし、ご協力をいただきXでも投稿した。平均して毎年1万5,000人弱の来館者数で推移している。コロナ前はやや多く1万5,500人程、コロナ禍で1万1,000人にペースが落ちたが、去年今年くらいから徐々に回復しており、できれば1万5,000人を目指したい。

《意見・質疑応答1》

(渋川 委員)

20周年を迎え、若返ったと思った。幼稚園生や学校の先生のための企画は本当にいいと思う。高校生ボランティアが積極的だったが、ボランティアをやった人の感想や反応があったら教えて欲しい。

(小林 副館長)

高校生ボランティアは新潟工業高校のボランティアクラブが発端。近年ボランティア活動によって進学上の評価が高まることがあるようで、それもあり広く募集したら他校の生徒も参加するようになった。動機はともあれ、参加者は一生懸命に企画を考え、前述のイベントをするために5回程それぞれ集まって企画を練って準備していた。イベント後も年長ボランティアと体験企画に参加し、共にこの冬まで活動していた。非常にやる気があり、我々も活力を感じ、雰囲気も明るくなっている。継続していきたい。現役のボランティアにもいい刺激になっている。

(南雲 委員)

この会議はいつも形式的に終わらず、前向きでエネルギーを貰える会だと思って参加している。小林副館長から案内をいただき秋のバスツアーに参加した。私もバスガイドをしていて、点から線、線から面へと言うが、点でしか知らなか

ったものが立体的につながり、大変いいバスツアーだった。

はじめてみなとぴあや教員の日はすごくいい試みだと思った。今後、幼稚園や学校を増やす計画はあるか。教員の参加条件は、市内や若手など設定しているのか。参加教員の年齢層を教えてください。

(小林 副館長)

教員の日当館が初出でなく、日本博物館協会が提唱する「教員のための博物館の日」を取り入れた。関係機関に相談をし、そこから情報を送ってもらい、チラシも作った。市内の教員にしか情報が届かなかった可能性があるが、とくに参加条件はない。興味がある方に来ていただきたい。今年始めたばかりでまだ浸透していないので、継続して一つひとつ積み重ね、認知度を高めたい。年齢層は20代～40代くらいだった。

はじめてみなとぴあは、ブックスタートという未就学児に図書館等に親しんでもらう事業を博物館に応用し、学芸員が中心になり園に話を持ち掛け、連携するようになった。近場の歩いて通える保育園にお声掛けし、現在は西区の園にも広がった。

(森 学芸課長)

はじめてみなとぴあの補足だが、赤沢保育園や入舟保育園は当館の敷地に元々よく遊びに来ていた。ただ子ども達が賑やかというのもあり先生方の意識として館内に入る関係になっていなかった。せっかくなので館内を利用して欲しいということが理由の一つ。また小学校3年生時点では当館にかなり来ていただいているが、その前段階の来館経験がその後どう影響するか、様々な期待を込めて立ち上げた。広く子ども達に関わる当館の事業を通じて、世のあり方や歴史、文化を受けとめ、子ども達自身が行動を起こしていくことにもつながるか。

(石黒 委員)

保育園から高校生、先生方まで、博物館に行ってみるだけでなく、すそ野を広げて体験型の企画をされており感心した。私は中学校教諭だが、園バスがあるので保育園児のほうが外出しやすいと思った。高校もバスがある。小中学校がここに来るにはバスを頼まないといけないが、学校の現場に居ると難しいところもあ

る。

教員の日について、新潟市の全教員にはメールで発信された。ただこの時期はお盆前で、夏休みとはいえ教員は休みではなく、日を指定されると出づらい。ただ小学校には市小研に社会科専門の教員組織があり、中学校も中教研に社会科教員の集まりがあるので、そこに来年度働きかけ、日程を調整して設定していただければありがたい。

《博物館の理念・課題・評価について》 補足

(小林 副館長)

当館は開館 20 周年を迎え、旧小澤家住宅も開館 13 年。この間に博物館を取り巻く環境も変わってきた。開館翌年には新潟市が合併し当館が対象とした新潟市域が拡大してしまった。その後財政状況が苦しくなり予算が削減され、また少子化問題や I C T の普及に当館も追従しなければならなくなった。そして当館が拠り所としている博物館法が改正され、開館 20 年を経て老朽化により各所に不具合が生じてきている。これらの課題・問題に対応しながら今日的な博物館の運営をするにあたり、当館館長より事業について客観的な評価をいただいて改善しながら運営を図っていくべきではないかという提案がされた。我々も協議を重ね、客観的な評価を委員の皆様にしていただけないかと考えた。方針がないと評価ができないと思い、今回は方針案を提示させていただいた。

《意見・質疑応答 2》

(中村 (美) 委員)

まっすぐに方針を立てたと思う。好ましく望ましい姿ではないか。

「2 - (1) 人口減と少子高齢化の進行」で、新潟市への流れを生み出すことが非常に重要であり、特に今は移住者・他拠点居住者も多い。移住者からは最初にどこに行けばいいかと聞かれ、まず博物館から、と答えることが多い。「新潟市とはなんぞや」を知りたいときに、最初に博物館を訪れるきっかけがあることを念頭に置くことが大事。移住者は地名が読めないなので、ルビを振るなどして分かりやすくしていただけるとありがたい。

障がい者に対する配慮がまた広がっていくインクルーシブに関して。私自身は障がい者当事者が街歩きガイドをする団体「にいがたユニバーサルまち歩き」の事務局をしているが、いま残念ながら聾のガイドしかいない。実は県内各地から聾者が聾学校（よつば学園に統合）に入学し、寮生活をしながら言葉や音を知っていくので、新潟市の歴史は本当に知らず、教えられる機会がない。次年度の活動を決める時、繰り返し教えてもらわないと分からないからと、博物館にまた行きたいと言われる。そのように半ば諦めていた部分を、博物館を通じて知って喜んでいる姿を見ると、そういった人に対して、博物館の方から「来てください」と言ってもらいたい。

言語の対応は、現在はほぼ機械ではなく二次元コードを読み取るような形式になっている。かっこよくないかもしれないが、結構うまくいくのでは。今後作られるミュージアムシアターは、字幕を付けるのも大事だが、二次元コードで見れる手話通訳があると非常に助かる。聾者にとっては当然なのだが、画面を見ながら手話を読み取るのは大変で落ち着かないそう。聾者になって間もない人にとっては両方見るのは辛いですが、手話動画で改めて見直すこともできる。物理的に難しい部分はそういった対応をしては。

できないことは先に言った方がいい。何々はありません、こういう対応は難しいです、ご相談ください、と段階別に情報発信すれば相談できる。

新潟市の職員が新潟の歴史に関わる写真などを使う場面も多いが、どう探し出すかが凄く大変そう。どういう資料があるか検索し、相談できるといい。特に中途採用者は他市町村から来た人もおり、歴史的な部分のフォローも必要。そういう意味でもギャップをつなげるフォローアップ体制があるといい。公務員向け・市職員向けの企画もあってもいい。改めて新潟らしさを考えてみましょうという投げかけを博物館がするのも新潟の魅力を再発見するのにいいのでは。

（小林 副館長）

実は館長からも、移住者にとって分かりにくいと指摘を受けている。この話題の場所を地図で示したらいいと言われているが、まだ実現できていない。改定を図りたい。

現在音声ガイドの機械が壊れ、英語と中国語では二次元コードを読み取ってもらう対応をしている。しかし無線 LAN が入っていないため使えない場面があり、一歩後退している部分もある。それも含めて ICT が課題なので予算の制限

はあるがなるべく働きかけていきたい。

尊者の実情についてはまた別の機会に中村委員に教えていただければありがたい。

(久保 委員)

充実した活動をしながらか教育や様々な所を改善していこうとしており素晴らしい。まだたたき台とのことなので、どういった検討をしているのかお尋ねする。

資料2「①多様な主体との連携」で「※原則として依頼を受けて」とあるが、個人的には博物館のほうから連携を申し出た事例を含めて考えても良いと思った。なにか意図があれば教えて欲しい。

また「②資料情報のデジタルアーカイブ化」で「文化財の下案」とあるが、具体的にどういった文化財を示しているのか。

さらに「③展示事業：インクルーシブな視点での改善」の事業では場合によっては費用がかかるのではないか。かからない工夫もあるとは思いますが、かかる部分については予算をどのように考えるか、継続性はどの程度担保できるか、現時点で計画があれば教えて欲しい。

さいご「⑤-3 ミュージアムショップの充実」。こういった視点で改善に取り組むことに関心があるが、売場面積については目標設定が悩ましいと思った。大きくすることに意義があるわけではない。現段階でどのような見通し、予定があるのかを聞きたい。

旧小澤家住宅は博物館とはスタッフの人数や施設の性質も違うので、同じところもありつつ全く同じとはならないので難しい。特にインクルーシブな視点での改善について、毎年当初に課題設定をし改善を図ることは大事。どういったところに課題があり、どのようにして見つけていくのか、現状での考えがあれば教えて欲しい。

(小林 副館長)

①連携について。新潟日報を含め、いろいろな企業から年間40~50回程依頼があり、それを何とか断らないで受け、なるべく多くの団体さんと接触する機会を確保している。当館のほうから話しかけて連携するところまで至っていない。

(森 学芸課長)

②文化財の下案提案について、まだこの項目ではどういった活動・取組が可能か相談をしている段階で、内部で精査し意見をいただきながら修正を加えていきたい。当館で企画展や講座の調査をしていて、その蓄積をせっかくなら歴史資料、文化資源の価値を高めていくことに貢献できないかと考えており、文化財審議会の候補となるような文化財の提案を上げられないかと考えている。当然それは主管課との相談となるが、この活動評価表案ではまずいろんなアイデアを入れている。

(小林 副館長)

③インクルーシブについて。当館の予算では難しいが、前述の映像は、ようやく市に新規制作を認めてもらえたもの。新規に作るものはインクルーシブな視点を盛り込み、今までできなかったことを他にしていきたい。例えば中村委員から提案があった移住者向けの情報発信や、地図を作って提示することは費用をかけなくても、できるところから始めていきたい。去年は、手作りだが外国人向けに常設展示の英文解説を加えた。

ミュージアムショップの売場面積について、資料では「ミュージアムショップの充実」となっているが、正しくは「ミュージアムグッズの充実」に訂正する。当館はショップと言えるほど売り場が広くなく、ショップを充実させていくのは難しいので、少数ながらもきらりと光るような商品を揃えていこうと考えており博物館に見合った縄文グッズなどを置いているが、新潟の歴史を発信できるものを置いていきたくこれから検討していく。

(久保 委員)

博物館のこれまでの蓄積を、文化財制度の位置づけに持って行く基礎資料提供までやるのは意義が大きく、博物館にしかできないことだと思う。場合によっては周辺の施設や知見のある人と連携していく際にも、核になるのは博物館の皆さんだと思うので、素晴らしい取り組み。私も可能な範囲で協力したい。

(鷲尾 旧小澤家住宅館長)

活動評価表ではインクルーシブのくくりだが、当館はそこまで至っておらず、バリアフリーやユニバーサルデザインのレベルに留まっている。13年前に開館

し、新潟市や建設業者でその時点の最新の考え方や工夫をして建物・設備を整備したが、やはり元々明治時代の建物なので当然ユニバーサルではなく使いづらい。健常者の若い方であれば全然苦にしないところも、例えば高齢者や身体の不自由な方に使いにくい部分がある。また薄暗いところがあってよく展示が見えないといった不具合を感じている。例えば文化的背景が違う方が当館の展示をみてどう思うか、または理解が難しいこともあろうかと思う。一足飛びにそこまでの検討や、対応した展示に変えるのが難しいので、まずはボリュームゾーンの高齢者や身体の不自由な方が当館で使いにくい点や危険だと思われるところをもう一回点検しそこを直す、つまりバリアフリーからスタートしたい。バリアフリーが良い線いったら、次はユニバーサルや、外国の方やLGBTなどいろんな文化・考え方に光を照射して問題がある点を洗い出し、少しずつ改善していこう考えている。費用という点では厳しいが、修繕費等はあるので、できる範囲で活用しながら、全部は無理でも少しずつ、やっていけばいいのかなと考えている。

(久保 委員)

文化財施設とバリアフリーの兼ね合いは非常に難しいところもあり、また予算の件もあり、おっしゃるとおり優先順位をどう付けていくかがすごく大事に思う。大変だとは思いますが、少しずつ進んでいくのかなと思った。

《意見・質疑応答3》

(渋川 委員)

企画展の収蔵品展・新収蔵品展についてまだ決まっていないとのことで、私もにいがた湊あねさま倶楽部という立場から提案する。今年戦後80年で、港にどんな戦争被害があったかという資料があれば、戦争に関するものを触れてもいいのでは。個人的な思い出も含めて、ご検討いただければ。機雷が落ち、港が封鎖になっている事実はあんまり知られておらず、ぜひご検討いただきたい。

(小林 副館長)

夏にも同様の企画があり、時期が収蔵品展に合わせられるか相談させていただく。企画展として大きくは出来ないかもしれないが、やれる範囲で検討したい。

(中村 (美) 委員)

北前船について、同じ企画でも継続していいのではないかと思った。北前船を白山神社で見て更に知りたいと思ったら博物館に足を運んでもらえる回遊性を狙いたい。昨年度そういう話をさせていただいたが、毎日違う業務が同時並行であり忙しいなかで、比較的集客力のある定番的な企画を間に入れながら、新しいものを入れていくような形式でやっていった方がリフレッシュ出来ていいのかなと思う。

(小林 副館長)

新潟市が北前船の日本遺産認定自治体になっていることを知らない市民も大勢おり、認知度は高めていきたいと思っている。今後相談していきたく、要望があれば積極的に情報を出したい。

(中村 (美) 委員)

ここに模型があることも、関連づけないと分からない感じになっている。

≪「新潟市令和7年度予算案の概要」等の説明≫

(萬歳 課長)

市の事業の中から博物館・旧小澤家住宅に関わるものを簡単に説明させていただく。来年度の当初予算案として、本日午前に市長から記者会見で紹介したもののについて。「ラムサール条約都市の推進に向けた取組」の新規事業「水がつなぐ各地域の歴史・文化の魅力発信」は当課が計上した来年度重点事業予算案で、先ほど小林副館長が説明した映像制作・街歩きツアーにかかる事業である。予算額 500 万円で計上している。こちらは 2 月議会で中身を審議いただき採決をいただく。

かねてより博物館は水と人々の歩みをテーマに各方面から研究をし、常設展示もその内容となっている。開館 20 周年で何かやろうということで「北前船と新潟」展やツアーなど盛り沢山やり、おかげさまで非常に評判が良く認知度も高まっている。それを踏まえ、来年度はせっかくなので水を広げて、本市の特徴である川湊や潟など水全般にまつわるものを映像化し、シアターのメニューに加

えたいと予算要求をしたところ、満額ではないがお金が付いた。令和 8 年度まで 2 か年に渡って映像制作をする。四季の映像を撮りたいが春からは始動ができないため 2 か年かかる。再来年もほぼ同額が計上される予定。

現在合併により 8 区に分かれているが、各地域の歴史や文化資源を生かして街歩きガイドが活動している実態がある。特に潟のガイドに関して情報共有する場がないという話が従前からあり、一堂に会したシンポジウムのなものや、今年度大変好評だった街歩きツアーも考えている。

令和 8 年度、新潟市で世界湿地都市ネットワーク市長会議がある。世界から潟の研究者や活動家が一堂に会すもので、日本国内で開催するのは新潟市が初めて。その準備の意味も兼ね、新作映像を会議の方にダイジェスト版で流したいと、まだアイデアレベルだが考えている。潟に限って言えば、今まで環境面や理化学的な面ではあるのかもしれないが、そこで暮らす人々の歴史や文化的側面の発信は今まであまり無かったかと思う。せっかくのいい機会なので映像制作をはじめとし、それらも新潟市の特徴だということを P R したい。

二つ目に、入館料改定について。先回の運営協議会で頭出しをしたが、新潟市では令和 6 年 3 月に公の施設に係る受益者負担の設定基準が定まった。一定期間公益施設を利用する方にある程度ご負担をお願いするという基準である。これを元に全市の該当施設の使用料が適切か検証させていただいた。博物館・旧小澤家住宅は入館料・設備使用料をそれぞれ 3 割上げることとなった。なお免除規定は継続され、例えば教育普及目的や、障がい者手帳をお持ちの方は使用料免除としている。昨今物価が上がり、これもかという意見も頂戴している。市においても 20 年間値上げは押さえてはいたが、昨今の人件費や光熱水費の高騰を受けての処置であるため何卒ご理解等賜りたい。

これまで博物館の閉館時間を 4～9 月は 18 時、10～3 月は 17 時としていたが、夏季の 17 時～18 時の来館者が一人ないし二人という状況で非常に少ない。そこで今回議会に確認をし、令和 7 年 4 月以降は通年で 17 時閉館とさせていただく。これにより一時間分の光熱水費が若干浮くので、その辺を展示や別の運営面に回したいと考えている。なお現在も敷地の一部については 24 時間開放しており、私も春に来ると夜桜を見ている方や、外国の方がこの建物で一時間以上写真を撮ったりしている姿も見ている。それらは当然継続するので、こちらもご理解賜りたい。

≪意見・質疑応答 4≫

(大籟 委員)

もう当然実施されているかと思うが、瀉環境研究所のホームページを環境政策課が引き継いだものを今見ながら聞いていたが「瀉のデジタル博物館」というサイトが非常に充実してる。ぜひこれもセットで、市民の皆さんがわかるようにPRしていただきたい。

以上